

中年女性の幻覚妄想状態 (第1報)

—— 退行期妄想症再考 ——

浅野 弘毅, 近藤 等

はじめに

人生後半期の幻覚妄想を主とする病態は、古くから研究者の注目を集めてきた¹⁻⁸⁾。

なかでも、Kleist は、1913年に退行期に出現し、妄想形成と幻覚を伴う精神病について詳細に記述している⁹⁾。

彼のいう *Involutionsparanoia* は、主として更年期の女性にみられるもので、経過は、慢性のもの、増悪期をくり返すものなどがあるが、意識解体や痴呆には至らないとされている。主症状は被害妄想と誇大妄想で、幻覚をとともなう場合もある。

病前性格としては、きわめて活動的で、自己中心的で刺激的な性格、あるいは敏感で猜疑的刺激的な性格、すなわち〈妄想素質 *hypoparanoische Konstitution*〉と呼ばれる人格が認められ、しばしば(10例中7例)未婚の女性に多いと報告されている。

原因として Kleist は、一方で前精神病的な性格特徴の病的な増強の結果、この疾患が発現すると考え、他方でこの年齢の内分泌状態の変化を想定

した。

Kleist のほかにも、1900年代の初めから1920年頃にかけて、ライフサイクルのこの時期に発症する妄想精神病の1群に対し、いくつかの疾病概念が提唱されたが、Mayer-Gross⁷⁾はこれを遅発妄想型分裂病とし、Bleuler⁸⁾は、退行期パラノイアも妄想型分裂病の下位型とみなせるとして、結局は、遅発分裂病に吸収されてしまった。

1960年、Pauleikhoff が、30歳台の幻覚妄想精神病について発表し⁹⁾、1969年には、39歳と40歳の2女性を追加した¹⁰⁾。

この報告は、直接的に退行期を論じたものではないが、近年の妄想の状況論的発病年代論的研究¹¹⁾の端緒をなすものであり、わが国にも大きな影響を及ぼした(表1)。

Pauleikhoff に刺激される形で、ここ20年の間に中年期のパラノイド状態について、わが国でもさまざまな報告がされている¹²⁻²¹⁾。

とりわけ、杉本は、疾病論的に独立の地位を与え、退行期の幻覚・妄想症について「生活史的に規定された独特の人格の発展と、老年者にみられ

表1. [退行期妄想症] 研究史 (国外)

1852	Lasègue, C.	délire de persécution
1878	Krafft-Ebing, R.v.	Irresein im Klimakterium
1899	Kraepelin, E.	präseniler Beeinträchtigungswahn
1905	Friedmann, M.	milde Paranoiaformen
1913	Kleist, K.	Involutionsparanoia
1918	Kretschmer, E.	sensitiver Beziehungswahn
1943	Bleuler, M.	Spätschizophrenie
1960	Pauleikhoff, B. }	Paranoid-halluzinatorische Psychose im 4. Lebesjahrzehnt
1969	Pauleikhoff, B. }	

表 2. [退行期妄想症] 研究史 (国内)

1969	木戸	中年婦人の幻覚妄想状態
1970	市川, 斉藤	30歳台女性の妄想・幻覚状態
1975	西丸 (甫)	退行期妄想幻覚状態
1977	杉本	退行期の幻覚・妄想症
1978, 80	濱田 (秀)	40歳以降の幻覚妄想状態
1980	水上, 五味淵, 飯田	中年女性の幻覚・妄想精神病
1981	長井	「村八分」妄想
1983	永田	引越妄想病
1984	高橋 (俊)	中年後期のパラノイド状態

る一般的な心性を基盤とし、心因的な契機と関連して発病し、精神病理的には分裂病的な特徴を示す幻覚・妄想状態を進展させる精神病である¹⁵⁾と定義している (表 2)。

今回、われわれは閉経期に幻覚妄想状態を呈した 5 例について報告し、女性のライフサイクルと妄想発生の状況因の両面から検討を加えた。

症 例

1. 初診時 50 歳の看護助手

(1) 同胞 5 人中の第 2 子。県立高女卒業後、実家の農業の手伝い。24 歳時結婚。初めから意にそまぬ結婚だったため、2 年後に離婚し実家に戻った。31 歳時、開業医で看護助手を 3 ケ月やり、その後、病院に就職、10 年間大過なく勤めたが、同僚と旨いかず、42 歳の時辞めてしまった。43 歳で再婚。相手に前科のあることを知らされていなかった。

(2) 病前性格は、内向的、無口、神経質で劣等感が強い。

(3) 49 歳閉経。

(4) X 年春 (本人 49 歳)、夫が強姦未遂事件を起こし逮捕された。担当弁護士からは 4~5 年の実刑は確実と言われていたが、精神鑑定の結果、同年末に無罪判決がおりた。身内からは離婚を勧められたが、本人は別れずにきた。

X+1 年 2 月末から誰かにつきまわられているのに気づいた。入院患者の死亡が重なり、3 日間仮眠もできなかった。3 日目の午後市職員が隣の家の水道料のことを尋ねにきたが、その人が夫の

事件の裁判官にそっくりなので変だと思った。妹の家へ出かけようとしたら、その人が歩いていた。つけられていると思った。その後、おおぜいの人が、本人の周りをうろうろし監視しはじめた。通勤の途中や病院に来てからもおかしい。仮眠室に入ったら、他科の助手さんが立っていた。あやしいと思って、婦長に聞きにいったりもした。自宅に帰ってからも監視されている。夫の犯罪に関係した人で、ヤクザらしい。近所の店のマスターも変装して見張っている。

(5) X+1 年 3 月初診。妄想知覚、追跡妄想、注察妄想を中心とした妄想状態。

(6) 治療開始後も活発な妄想体験と妄想性解釈が続いたが、3 週間程の服薬で急速に消失した。病院で盗難事件などがあると、「もしや」と思ってしまい、夫のことが常に心の中にありながら、誰にもうちあけられずにきたという。

2. 初診時 52 歳の主婦

(1) 同胞 10 人中の第 2 子。高等小学校を上位の成績で卒業後、洋裁学校に通ったり、実家の農業を手伝ったりして、22 歳で結婚。子ども 3 人はいずれも独立し、夫との 2 人暮らし。4 人の学生に間貸しをしている。

(2) 病前性格は、勝気で自己中心的。

(3) 50 歳で閉経。

(4) X 年 1 月 (本人 51 歳)、間貸ししていた学生 2 人が塾を始めたら生徒が大勢集まり、応対が大変なのでやめてもらった。また、学生が夜騒ぐので注意したことも 2 度程あった。

その頃より、天井でバチン、バチンとガラスの割れるような音がしだした。音と同時に心臓にピリピリと電気のようなものが刺さってき、不安で眠れなくなった。

6月初め交番に届け出たが「わからない」と言われ、電気工事屋を呼んで点検してもらったところ、別段異常はなかった。その時に「誰か電気に詳しい人がいて、実験でもしているのだろう」と言われ、工学部（電気工学専攻）を卒業した医学生が犯人と思いが当たった。当人を問い詰めても白を切るが、その人のいる時しか音がしないので間違いないと考え、これ以上苦しめられては頭が狂ってしまうと思い、その学生に出してもらった。

ところが、翌日から、向かいの家から電波が流れてくるようになり、頭がしびれるようになった。向かいの家のTVのアンテナが移動しているのにも気がついた。1日中苦しめられるので、直接談判に行ったら、近くにマンションが建って見えにくくなったから移動したのだと説明されたが、マンションは3年前に建ったので話がおかしいと思った。

その前年、向かいの家が土地を売り、そこへ倉庫が建ったが、その際、日当たりが悪くなる、道路が狭くなるということで、本人は市役所に相談に行っているが、その際、土地の広さに食い違いのあることを知った。

向かいの家を訴えてやると言ったので、逆恨みをして、学生を手先にしていたに違いない。その学生を追い出したので、今度はTVのアンテナに細工をし、本人を苦しめ、狂わせて殺そうとしたに違いない、と考える。

(5) 同年8月、初診。妄想着想、幻聴、物理的被害影響体験、体感異常、妄想加工、好訴妄想などを主症状とする幻覚妄想状態。

(6) 10月まで内科に入院していたが、その間は音がしなかった。ところが、帰宅すると、再びバチンバチンと電波が始まって眠れなくなった。

翌年1月から2月まで、精神科に入院したが、被害妄想の大系化は変わらなかった。

3. 初診時 50 歳の主婦

(1) 同胞8人中第7子。子ども2人は独立し夫と2人暮らし。旧制高女卒業後、洋裁を習い20歳で結婚。舅姑と同居、舅は6年前、姑は12年前に死亡している。

(2) 病前性格は勝気、几帳面で、物事をきちんとしないと気がすまない。

(3) 閉経43歳。

(4) X年6月(本人48歳)、以前から準備していた自宅の増築に取りかかった。前の家との境界も設定し、側溝の経費も両者で折半することでスムーズに話が進んでいた。工事着工の当日、測量に立ち会ったところ、杭が4~5cmずれていたの、測量する人が元に戻してくれた。そこへ前の家の主人がきて、本人が動かしたと誤解して「たまげた女だ」と悪口をいいふらし始めた。その後、前の家では側溝の経費を出さないとやってきた。直後に突然前の家の犬が死亡。近所の人達が、本人が猫いらずを食わせて殺したといいふらしている声ははっきり耳に聞こえるようになった。遠くから本人を指差して悪口を言っているのを目撃したこともある。増築をねたんだのか、常識では考えられないことが起こりだした。

X+1年1月、町を二分して町長選挙が戦われたが、本人の噂は一層ひろまった。杭を動かしたのも本人、犬を殺したのも本人、あげくの果て、本人は頭狂ってノイローゼになってしまったという噂も聞こえるようになった。ところが、選挙の最中に、2軒後ろの料理屋で、その嫁が「犬を殺したのは自分で、町長候補に頼まれてやった」と白状するのを6回耳にした。料理屋の主人が夫と同級生なので、嫌がらせをしたに違いない。本人が、噂をやめるように斜め前の家に頼みに行ったが、相手は白を切って埒があかない。投函した手紙も開封され、内容をいいふらされるし、留守中に植木屋が忍び込んで本人のメモをみて、料理屋で報告しているのも聞こえたという。

(5) X+2年6月初診。幻聴、注察妄想、被害妄想を中心とした幻覚妄想状態。

(6) 入院後も幻聴、注察妄想が続き、1ヶ月以上にわたり拒薬。服薬すると病的体験が消失する

表3. 症例一覽

症例番号	1	2	3	4	5
病前性格	内向的, 無口 神経質	勝気, 自己中心 的	勝気, 几帳面 完璧主義	内向的, 無口	心配症, 几帳面
家族構成	夫のみ	子供独立	子供独立	子供独立	夫単身赴任
発病年齢	50歳	51歳	48歳	51歳	54歳
閉経	49歳	50歳	43歳	50歳	54歳
誘因	夫の犯罪	間貸し人とのト ラブル	自宅の増築	子供の独立	退職
症状	追跡妄想 注察妄想	幻聴, 物理的被 影響体験 体感異常 好訴妄想	幻聴 注察妄想	注察妄想 幻聴 体感異常	幻聴 注察妄想 独語
経過	急性発症 短期改善	急性発症 妄想体系化	急性発症 慢性経過	急性発症 短期改善	急性発症 慢性経過

が、外泊すると再燃をくりかえした。2ヶ月半で軽快退院したが、ごく少量の抗精神病薬の服用で幻覚、妄想は消失するが、怠業により軽い再燃をくりかえしている。日常生活上の支障はとくにない。

その他の症例については、一覧表で示す(表3)。症例4は、子どもの独立が契機となって、注察妄想、幻聴、体感異常を呈した症例で、陽性症状は短期間で消失したが、その後自律神経症状が持続した。

症例5は、長年務めた看護婦の退職および閉経と同時に、幻聴、注察妄想、独語を生じた症例で、慢性の経過をたどった。

症例のまとめ

以上の5症例に共通する特徴について、以下に

表4. 症例の特徴

(1) 病前性格: 広義の敏感性格
(2) 発病状況: 孤立
(3) 発病年齢: 閉経期 (50歳前後)
(4) 誘因: 喪失 (人間関係, 財産, 地位, 健康)
(5) 発症: 急性
(6) 病像: 被害妄想 (具体的他者)
(7) 経過: 妄想発展, 疎通性保持

まとめて述べる(表4)。

(1) 病前性格は、内向的、神経質で傷つきやすい半面、勝気、几帳面、頑張り屋という点で共通しており、広義の敏感性格といえることができる。

知的にも優れており、過去の生活では平均以上の達成を示し、仕事の面では有能さを発揮している。

そのために、退行期まで生活上破綻を来さずにこれたものと推測される。

(2) 発病状況としては、子どもの独立や退職などによる対人的孤立が目される。また、複雑な家族状況のなかでの心理的孤立が関係している症例もある。

(3) 発病年齢は、いずれも50歳前後で閉経後という点で一致している。

(4) 誘因は、人間関係にしろ財産、地位、健康にしろ、いずれもなれ親しんだ対象や所有物の喪失である。

(5) 発症は、直接前駆する要因にひきつづき、急性である。

(6) 病像は、被害妄想が中心で、表現はさまざまであるが、登場する妄想的他者は、具体的な他者で実在する人間のことが多いという特徴をもっている。

(7) 経過は、妄想の発展傾向を認めるが、疎通

性が保たれ、人格のまとまりが保持されている。

考 察

1. ライフサイクルにおける中年期の意味

ライフサイクルにおける中年期に注目されるようになったのは最近のことである²²⁻²⁹⁾。

Klages³⁰⁾ は、40～50歳に認められる発達心理学的特徴を、① 全般的な欲動の減退、② 人格が全体的に内面へと向かう傾向、③ 20～30歳代の職業的成功に方向づけられた段階から、人格の深化とか成熟によって、職業から家庭への切り換えをとまなう平静な本質特徴が優位になる時期、と述べている。

Neugarten³¹⁾ は、中年の重大な関心事についてつぎの6項目をあげている。① 家庭での役割の変化、② 老親の世話、③ 後継者の育成、④ 職場における役割の変化、⑤ 内省、⑥ 時間の観点の変化、すなわち誕生からの時間ではなく残された時間を考えるようになる。

佐藤ら³²⁾ は、中年の発達課題を、① 社会的役割の変換、② 自らの限界と死の受容、③ 自らの幼児的問題の解決、の3点に要約している。

また、Jaques³³⁾ は、中年の心理的転回をはじめて中年の危機 (mid-life crisis) と名づけた。

King³⁴⁾ は、中年期の社会的心理的ライフイベントとして、① 性的能力衰退のおそれ、② 職場における役割の喪失に対する脅威、③ 子供が自立した後の夫婦に起因する不安、④ 老化の自覚、⑤ 死が避けがたいことの認識、をあげ、中年期には思春期に直面した課題と同様の、ただし逆方向の課題に直面すると述べている。

湯沢³⁵⁾ によれば、中年期危機的心性はつぎのように定義されるという。① 身体的衰えの自覚、② 青年期後半に行った重大な決定、とりわけ配偶者あるいは職業の選択について根本的に誤ったのではないかという疑念、あるいは今までの自分の生き方についての後悔。③ すでに確立した社会的地位、家庭的役割のすべてを投げ出したい、現実からドロップアウトしたいという内的衝動。

以上みてきたように中年期においては、種々の生活領域で、それまでとは異なる新しい社会的役

割の変換が必要とされる。全般的に外面的な価値方向が内面的な方向へと変わる時期でもある。また、自らの限界と死をめぐる課題も登場してくる。そうした内面的課題の解決を迫られるのが中年期とすることができる。

2. 更年期の心理

女性の退行期をさす更年期 (climacterium) という言葉が医学用語として使われるようになったのは近年のことである。閉経 (menopause) は月経の停止を意味するが、更年期は閉経に前後して起こる身体的および情緒的変化のすべてを包含している。

Notman³⁶⁾ は、更年期の各種症状は、従来いわれてきたほどホルモンの影響を受けないとして、社会的・心理的側面の重要性を強調した。女性の中年期は思春期と対比することができる。思春期は両親からの分離、中年期は子どもからの分離と、ともに家族との分離が課題になるとした。

Lidz³⁷⁾ によれば、女の印 (badge of womanhood) の喪失は女性の自己愛 (narcissism) を傷つけ、抑うつをもたらすという。

Benedek³⁸⁾ は、閉経にともなって出現する精神症状は単に生理的変化によるのではなく、むしろその個人の過去の精神性的 (psychosexual) 生活のあり方に左右される。閉経期の内的葛藤の乗り越えの失敗は、それまでの疲弊し柔軟性を欠く適応スタイルによって運命づけられると述べている。

したがって、Barnett ら³⁹⁾ は、これまでは女性の人生が生殖という面からのみ注目されてきたため、中年期の最大の課題は閉経と「空の巣 (empty nest)」⁴⁰⁾ であるとされてきたが、これからは仕事や家族ライフサイクルを包括した見方が必要であると説く。

このように、更年期は「親期」から「脱親期」への転換期であり、荷おろしと同時に後悔と幻滅が生じ危機に襲われやすい。

さらに、この時期は、体の衰えの兆しによって心気的になりやすく、あるいは自己中心へと向かう傾向によって妄想的になりやすいことが知られている。

3. 妄想発生の状況因

さきにも触れたように、Kleist⁵⁾は、退行期の妄想発生の病因として、病前性格と更年期の内分泌的变化を重視した。

それに対して、Kretschmer⁶⁾は、妄想発生を性格・環境・体験という一連の連環から理解しようとした。とりわけ「老嬢の色情関係妄想」において、体質上の易疲労性と躁鬱病性素質に加えて更年期の病因的意義を強調した。すなわち、婦人における退行期の接近は、しばしば色情的感情生活の振り返りを生み、老嬢環境の屈辱的な地位における自意識の過度緊張とあいまって、葛藤の発生を容易ならしめると述べている。

濱田¹⁷⁾は、40歳以降に初発する幻覚妄想状態を、分裂病と同じ病的過程による侵襲を受けた主体が、その年齢に応じて示す異なった反応の表現と考え、分裂病圏に属する病態と考えた。

一方、高橋²¹⁾は、妄想内容の空極的意味は「喪失」と解釈できるし、誘因もまたうつ病の誘因と共通しているところから、中年後期のパラノイド状態はうつ病圏に属すると主張している。

上田⁴¹⁾は、発病の契機について、女性の場合は、近所づきあい、職場での対人的葛藤、家族間交流様式における孤独の問題など対人関係面での障害が主で、女性の対人志向的・愛情志向的特性や社会的立場と大いに関連していると述べている。

同様に、長井¹⁹⁾も、病前状況としての対人的孤立状況を強調したうえで、子どもの独立や姑の死という、家族成員の喪失が発病と重要な関わりをもつとしている。

水上¹⁸⁾は、中年女性の精神病理を、社会病理と個人病理との関連において論じ、中年初発の幻覚・妄想精神病は、特有の防衛様式によって思春期・青年期の葛藤の一時的解決をめざすが、今日の社会状況下で、状況的時熟として、その防衛様式が破綻したものであり、思春期・青年期の葛藤の再現として理解しうることを明らかにした。

さらに、吉松⁴²⁾は、中年期女性にみられる幻覚妄想状態発生状況の典型として、親戚や近隣との人間関係、また愛情問題や義理人情など複雑な感情がからんだ事情を契機として、まず本人が気に

し出し、やがて周りの人間もその事情を知って噂をし、騒ぎだすという形をとることが多いと指摘している。

以上みてきたように、更年期の女性が親密な対象や所有物の喪失に直面したとき、青年期に解決されるべき葛藤が再浮上する。そうした危機にさらされて、敏感性格者は妄想的になると考えられる。

おわりに

閉経直後に、幻覚妄想状態を呈した5症例を報告した。

病前性格は広義の敏感性格に属し、対人的孤立状況下に、対象喪失を契機として、発病していた。

発症は急性で、病像は被害妄想が中心であった。分裂病と異なり、妄想のなかに登場する他者は具体的な他者であるという特徴を持っていた。

経過は、妄想の発展を認めたが、疎通性および人格のまとまりは保持されていた。

こうした症例について、ライフサイクルにおける更年期と病前性格の観点から、若干の考察を加えた。

歴史的に一旦は分裂病に包摂されてしまった退行期妄想症の概念を再検討し、妄想を状況と年代の両面から捉え直すことの意義を強調した。

〔本論文の要旨は、第47回東北精神神経学会総会（1993年9月26日、盛岡）において発表した。〕

文 献

- 1) Lasègue, C.: Du délire de persécutions. Arch. generales de médecine et études médicales, t. 1, 1852. (高橋 徹 他訳: 被害妄想について, 精神医学 20, 575-587, 1978.)
- 2) Krafft-Ebing, v.: Ueber Irresein im Klimacterium. Allg. Z. Psychiat. 34, 407-417, 1878.
- 3) Kraepelin, E.: Psychiatrie. 6 Aufl. II Band, pp. 342-346 Johann Ambr. Barth, Leipzig, 1899.
- 4) Friedmann, M.: Beiträge zur Lehre von der Paranoia. Monatsschr. f. psych. u. Neurol. 17, 467-484, 1905.
- 5) Kleist, K.: Die Involutionsparanoia. Allg. Z. Psychiat. 70, 1-134, 1913.

- 6) Kretschmer, E.: Der sensitive Beziehungswahn. Springer-Verlag, Berlin, 1950. (切替辰哉訳: 敏感関係妄想. pp.45-88, 文光堂, 東京, 1961.)
- 7) Mayer-Gross, W. et al.: Clinical psychiatry. pp.501-502, Cassell & Company, London, 1954.
- 8) Bleuler, M.: Die spätschizophrenen Krankheitsbilder. Fortschr. Neurol. Psychiat. 15, 259-290, 1943.
- 9) Pauleikhoff, B.: Die paranoid-halluzinatorische Psychose im 4. Lebensjahrzehnt. Fortschr. Neurol. Psychiat. 34, 548-560, 1960.
- 10) Pauleikhoff, B. et al.: Zur Frage der Entstehung und Therapie paranoid-halluzinatorischer Psychosen im 4. Lebensjahrzehnt. Psychiat. Clin. 2, 65-84, 1969.
- 11) 笠原 嘉 他: 妄想. 現代精神医学体系・3A (懸田克躬 他編). pp.233-338, 中山書店, 東京, 1979.
- 12) 木戸又三: 一中年婦人の幻覚妄想状態—その力動的構造と疾病論的考察—, 精神医学 11, 93-98, 1969.
- 13) 市川 潤 他: 主として30歳台女性に発病する妄想・幻覚状態について, 精神医学 12, 405-411, 1970.
- 14) 西丸甫夫: 退行期妄想幻覚状態の精神病理学的考察—状況分析による診断学的寄与を目的として—, 岩手医誌 27, 175-212, 1975.
- 15) 杉本直人: 退行期の幻覚・妄想症. 臨床精神医学 6, 171-176, 1977.
- 16) 濱田秀伯: 40歳以降に初発する幻覚妄想状態の臨床的研究—特に予後の見地から—, 慶応医学 55, 111-132, 1978.
- 17) 濱田秀伯: 40歳以降に初発する幻覚妄想状態, 精神医学 22, 749-758, 1980.
- 18) 水上忠臣 他: 中年女性の幻覚・妄想精神病—状況・年代論的考察—, 分裂病の精神病理 9 (川久保芳彦編). pp.133-159, 東京大学出版会, 東京, 1980.
- 19) 長井真理: 中年および退行期女性の「村八分」妄想について—人間の学・役割理論的考察—, 精神医学 23, 465-472, 1981.
- 20) 永田俊彦: 転居後に発症する幻覚妄想状態—引越妄想病 (仮称) について—, 分裂病の精神病理 12 (村上靖彦編). pp.59-82, 東京大学出版会, 東京, 1983.
- 21) 高橋俊彦: 中年後期のパラノイド状態について, 分裂病の精神病理 13 (飯田 真編). pp.19-46, 東京大学出版会, 東京, 1984.
- 22) Gould, R.L.: The phases of adult life—A study in developmental psychology. Am. J. Psychiatry 129, 521-531, 1972.
- 23) Levinson, D.L.: The seasons of a man's life. Alfred A Knoff, New York, 1978. (南 博訳: 人生の四季. 講談社, 東京, 1980.)
- 24) 小此木啓吾: 中年の危機. 精神の科学 6 ライフサイクル (飯田 真 他編). pp.211-254, 岩波書店, 東京, 1983.
- 25) 河合隼雄: 概説. 精神の科学 6 ライフサイクル (飯田 真 他編). pp.1-54, 岩波書店, 東京, 1983.
- 26) 飯田 真 他編: 中年期の心の危機. 有斐閣, 東京, 1986.
- 27) 高橋俊彦: 中年期, 異常心理学講座 III 人間の生涯と心理 (土居健郎 他編). pp.215-270, みすず書房, 東京, 1987.
- 28) 西園昌久編: ライフサイクル精神医学. pp.250-261, 医学書院, 東京, 1988.
- 29) 飯田 真編: 中年期の精神医学. pp.1-91, 医学書院, 東京, 1990.
- 30) Klages, W.: Spätschizophrenie, Biographie und Klinik schizophrener Erkrankungen des mittleren Lebensalters. pp.48-51, Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart, 1961.
- 31) Neugarten, B.L.: Time, age and life cycle. Am. J. Psychiat. 136, 877-894, 1979.
- 32) 佐藤哲哉 他: 中年期の発達課題と精神障害. 精神医学, 28, 732-742, 980-991, 1208-1217, 1986.
- 33) Jaques, E.: Death and the mid-life crisis. Int. J. Psychoanal. 46, 502-514, 1965.
- 34) King, P.: The life cycle as indicated by the nature of the transference in the psychoanalysis of the middle-aged and elderly. Int. J. Psychoanal. 61, 153-160, 1980.
- 35) 湯沢千尋: 中年危機の心性を伴ううつ病について, 精神経誌 84, 412-423, 1982.
- 36) Notman, M.: Midlife concerns of women; Implications of the menopause. Am. J. Psychiatry 136, 1270-1274, 1979.
- 37) Lidz, T.: The person; His and her development throughout the life cycle. pp.486-510, Basic Books, New York, 1983.
- 38) Benedek, T.: Climacterium; A developmental phase. Psychoanal. Quart. 19, 1-27, 1950.
- 39) Barnett, R.C. et al.: Women in the middle

- years; A critique of research and theory. *Psychology of Woman Quarterly* 3, 187-197, 1978.
- 40) Lowenthal, M.F. et al: Transition to the empty nest; Crisis, challenge, or relief? *Arch. Gen. Psychiatry* 26, 8-14, 1972.
- 41) 上田宣子 他: 外来における幻覚妄想性精神病の位置づけ. 分裂病の精神病理 7 (湯浅修一編), pp. 1-22, 東京大学出版会, 東京, 1978.
- 42) 吉松和哉: 遅発性分裂病の精神病理学的考察. 分裂病の精神病理 16 (土居健郎編), pp. 191-217, 東京大学出版会, 東京, 1987.